天狗　2024.5.28~6.6

　基地の町、横須賀には、年に一回、「フレンドシップデー」という、米軍基地に一般人が入れる日がある。その日は毎年８月前半だが明確には決まっていない。、無い年もある、それは世界情勢による。

「勇気、電車来たぞ」貴じいさんがオレを呼んでる。
「オッケー」、オレは買ったばかりのエナジードリンクを持ったまま電車待ちの列に並んだ。
「車で行こうぜ」と言ったんだが、貴じいさんが「基地の周りには駐車場がねえ、あっても料金高いぞ」というので、電車で行くことになったんだ。

　京浜急行線「汐入駅」で降りた。
「基地はあっち」駅のホームで貴じいさんが指さす。
　貴じいさんが言うには、横須賀生まれの横須賀育ち、「通称、須賀っ子」ていう人種がいるらしい「オレが須賀っ子の代表だ」って、じいさんは胸を張る。
「何が『須賀っ子』なんだよ」ってオレが聞くと、「そのうち分かる、いいから付いて来い」って駅の階段を駆け下りた。
「急げば基地まで歩って１０分だけど、ドブイタ通りを見るか」って言うんで、付いてゆく。
　「ドブイタ通り」って噂には聞いてた。「♪これっきり、これっきり、これっきりーですか♪」って歌う、山口百恵の「横須賀ストーリー」の舞台だろ、オレでも知ってる。
　５分ぐらい歩いて貴じいが止まった。腰に手を当て、指さしてる。
「ここがドブイタの入り口だ」って貴じいが、ボソッと言った。
　左右に英語の看板がついた小さな店が並んでる。確かに普通の町並みじゃねえ。
「ドブイタ通りはここからずっと続くの？」って聞くと、「通り、は余計だ、ただドブイタって言え」、貴じいはちょっとムカついてテンションが上がってるみたい。
「須賀っ子はただ『ドブイタ』って呼ぶのさ、『通り』はいらねえ」
「わかったよ、オレも貴じいさんの血を引いてるから『須賀っ子』です。
　オレはハイテンションの貴じいに合わせることにした。
「オッケー行くぞ」、じいさんに続いて５０ｍぐらい歩くと、右側にお地蔵さんが
あった。
「ねえ、なんでこんなとこにお地蔵さんがあるのよ？」と言って足を止めた。
　米兵向けの店の並びに『お地蔵さん？』かよ、究極のミスマッチじゃん。
「それ、オレも歴史知らねえんだ、戦後出来たと思ったんだが、どうも江戸時代ぐらいから有るみたいだ、明治、大正、昭和、平成をずっとここでドブイタを見てきたんだな……」なんと貴じいさんが知らないみたい、オレはちょっと興味が沸いてきた。中央の石碑に何が書いてあるかのぞき込んだ。
「むやみに触るんじゃねえ、祟りがあるぞ」
　貴じいさんが焦ってる。「じいさんだなぁ、祟りがあったってお地蔵さんぐらいなら大した事はないんじゃない」とオレは無視して石碑の裏に回り込んだ。
「裏にも何か書いてあるみたい」奥はちょっと暗い、何か照明が、と戻った時、
「グラッ」と来た、「地震だ」、「グラッ」、「グラッ」、だんだん揺れが大きくなってきた。
「おいっ勇気、すぐ出てこい、危ねえぞ」、貴じいさんが叫んでる。
「震度３以上、４も越えたな……」オレはそう思いつつ、フラつきながらお地蔵さんを出た。
「フウッ」、１分ぐらいで揺れは収まった。
「けっこうデカかったな」と、貴じいさんと顔を見合わせる。
　回りを見ると、バイクが倒れてたり、看板が傾いたり、被害というほどじゃないが、町中がワサワサしてる。

「収まったみたい、もうちょっと酷かったら危なかったな……」、オレはそう言うともう一度お地蔵さんに入った。なんとしても石碑の裏の文字を読みたかったんだ。
「バカ、止めとけ」と、貴じいさんが追って入ってきた。
「あとちょっとで見れるから」とオレは石碑のてっぺんに手を掛けて裏へ回ろうとした。
「止めとけ、っつうのに」貴じいさんがオレの腰のベルトを掴んで止めようした。
「ボンッ」何かが破裂したような音、その瞬間「ドーン」と衝撃が走った。
「ドワーッ」という音と同時に地面が浮き上がったのを感じた。
「ダダダダ」、揺れじゃない、突き上げだ、地面がもう、ムチャクチャに動いてる。
「第二波だ」と思った瞬間、石碑が「グラッ」と来た。
「危ねえ」の「あ」を言おうとした瞬間、石碑が倒れてきた。
「ウエッ」悲鳴とも言えない声を出して、オレとじいさんは石碑の下敷きになった。
「……」、「……」
　時間の観念が消えた。どのくらい経ったのか、今が何時なのか分からない。
　意識はある。見ると、貴じいさんが倒れてる。ケガはないようだ。
「貴さん、貴さん」、オレはじいさんの肩を揺さぶった。
「ん……」程なくじいさんは目を覚ました。
「おう、勇気、大丈夫かよ……」
「大丈夫、貴さんこそ大丈夫？」
　地震は収まってた。ちょっと寝ぼけた感じがだんだん抜けてきた。石碑は倒れてるが、オレたち、直撃は受けなかったみたい。ケガもない。
「勇気、オレ、目がおかしい、なんか変だぞ」と、貴じいさんがつぶやく。
　オレはあたりをグルッと見回す。確かに変だ。町全体がちょっと燻ったような、
モヤが掛かったような変な色合いだ。
「ウッ」貴じいさんが唸った。
「勇気、ここ、現代じゃねえぞ」
「現代じやねえ？」、何言ってんだ、と言おうと思ったが、回りを見ると景色が違う。店や建物も位置こそ変わっていないが、景色が違う。
「貴さん、何だこれ？」
「お前も見えるよな、いいか、そこにあるトヨタのクラウン、１９７０年代の車だぞ」
　貴じいさんのつぶやきに目を凝らす。写真だけど、どこかで見た覚えはある。
「貴さん、今のここ、５０年前ってこと？……んな馬鹿なぁ……」と、オレは目をゴシゴシこすった。
「間違いねえよ、回りを良く見ろよ、看板の文字、プリントじゃねえ、手書きだぞ、全部が５０年前じゃねえか」
　目は見えてる、って事は「本当にタイムスリップ」したのかよ、オレはまだ信じられねえ。
「貴さん、手を出して」そう言うと貴じいさんは手を差し出した。
手をつないでみると手応えはある、「これ、現実じゃん」と叫んでオレは頭を抱えた。
「タイムスリップさ、オレ達は１９７０年代にいるんだよ」と、なぜか貴じいさんが確信したように言った。
「時空の理論は確立してねえ、それが夢の中では実現したってことか……」
「勇気、これは現実であり、夢の中でもある、そういう風に思えねえか？」と貴じいさんは余裕さえあるようだ。
　言う通りだ、「夢であり、現実でもある」というのが正しい。オレはだんだん理解出来てきた。大学の物理でちょっとカスッただけ、貴じいさんは学者だもんな。
「ふふっ、分かったか、さすがオレの血を引いてる、お前も正真正銘の『須賀っ子』だな」、貴じいさんは満足そうだ。

「貴さん、分かったけどさぁ、これからどうするの、夢だとしたら、いつ覚めるのよ」
「分からねえ、覚めねえかも知れねえ」
　何なんだ、なんでそこまで余裕で居られるんだ、オレは改めて貴じいさんを見る。
　気づいたらすげえノドが乾いてた。そう感じるとオレは電車に乗る前に買ったエナジードリンクを思い出した。電車に乗るんでバッグに入れたままだったんだ。
　バッグを明けると、あった、しかし手触りが違う。当然もう冷たくないが、「これ、ガラスビンじゃねえか」と、恐る恐る取り出す。
「ビンのコーラじゃん！」、オレは思わず叫んだ。表面に「CocaCola」と書いてある。
　オレの叫びに貴じいさんが反応した。
「懐かしい、５０年前のコーラじゃん」、貴じいさんは満面の笑みを浮かべる。
「飲むか？」と聞かれた。全然飲む気になれない。「いらねえ」と返すと、「じゃあオレが飲む」といって貴じいさんが受け取ってビンをしみじみ眺める。
「貴さん、それ、栓抜きが要るじゃん、持ってねえよ」とオレが言うと、「ふふっ、そう来ると思った」って貴さんは余裕だ。
「どうやるんだろう、歯で抜くのかな」って思った。
「見てろ」そう言うと、貴さんは道ばたの看板の所に行き、コーラの王冠を看板の角に引っかけて、右手で「ポンッ」と上から叩いた。
「バシュッ」とコーラが吹き出した。
「勇気、これがコーラの飲み方さ」と言って貴じいさんは美味そうに飲み干した。
「プハーッ、うめえ」
　豪快だなあ、これが『須賀っ子』だとすると、貴じいさんが自慢するのも頷ける。
そう思った。
　夢と現実、それが同時に存在する、そんな事があるんだ、と改めて思う。しかし夢ならいつかは覚める。じゃあ、覚めるまでこの世界で生きるしかないじゃん。オレは吹っ切れた。
「貴さん、５０年のタイムスリップとすると、今日は５０年前のフレンドシップデーなのかな？」
「暑いから夏なのは間違いない、たぶん日付も同じだろう」そう言って貴さんは、あたりを見回す。
「雰囲気、そうみたいだな、５０年前にもその日はあったからな」
「行こうぜ」そう言うと貴じいさんはスタスタ歩き出した。
　ドブイタ通りの角、貴さんの足が止まった。そこの店をじっと見ている。
「何か思い出したの？」オレが聞くと、貴さんが天を仰いだ。
「1974年、忘れられねえ思い出がある。この店にアルバイトで来ていた女の子、『平野さやか』って言うんだが、もう少しで彼女になりそうだったんだが、死んだ。
デートを二回しただけ、可愛かった……」
「ふーん、貴さんはドブイタにいろんな思い出があるんだな……」、いろいろ聞こうかと思ったら、吹っ切れたみたい。また歩き出した。
　ベース（米軍基地）の入り口まで来た。もう開場してる。多少回りが散らかっているけど、とりあえず今日の地震の影響はないみたいだ。オレたちは列に並んだ。
　入るのに特にチェックはない。長い棒とか持っていない限りはだれでも入れる。
　入って見ると、行っても良い場所、ダメな場所は分かりやすく別れている。それは当然として、行っちゃダメな場所を見て、オレは「ギクッ」と来た。軍服の憲兵が銃を持ってるんだ。「あれは飾りじゃなくて、実弾が入ってる」そう思うと、「やっぱ基地はヤバイ」と実感した。
「勇気、ここ、日本じゃねえからな、アメリカだから、下手したら銃で打たれるぞ、一応言っとくけど」と貴じいさんがニヤッとする。

「腹へったな」と貴じいさんが言うと、オレも腹のことを思い出した、ペコペコだ。
「ハンバーガー食うべえ」と売店に向かった。途中、貴さんがシワクチャのドル札を取り出した。「よかったな、たまたま今回、余ってる古いドル札を持ってきたんだ、銀行へ行くより基地の中で今のドル札と交換した方が得だって知ってるから」そう言って１０ドル札を１０枚も渡してくれた。
　本物の米国ハンバーガー、大味だけどまあまあだった。ただ、やたらデカイ。日本の３倍はある。コーラもビンがデカくて飲み干せない。基地を出るまでに飲むからいいや、と腰のバッグに押し込んだ。
　バーガーを食って一服すると周囲を見回した。テープで基地周回ルートが分かるようになっている。「貴さん、あのルート通りに行くと、何と何が見れるんだろう？」
「そうよな、前に来たときはまず潜水艦、原潜じゃねえけど。それから空母、あと工場とかな、ただ、それは年によって違う、よし行こうぜ」
　貴じいさんの合図でルートに沿って歩くと、海っぷちのエリアに潜水艦の展示があった。皆が列をつくって潜水艦に入って行く。
　潜水艦の中を見るのは初めてだった。しかし正直面白くはない。やたら狭いし、
何だか分からないパイプや配線の束、メーターだのを見ても感動はない。早々に外に出た。
「貴さん、潜水艦は面白くねえ、早く空母に行こう」オレは空母の絵が張ってあるルートを急いだ。

　空母のエリアに着いた。
「ド、デカイ！……」思わず叫びたくなる。近くでみると、まずその大きさに圧倒される。船と言えば、乗った経験はフェリーぐらい、それでも「デカイ」が、空母は迫力が違う。──「ド、デカイ」──んだ。
「勇気、思い出した。この空母『ミッドウエー』だぞ、6万4千トンある」
「ミッドウエー？　聞いた事あるなぁ、それって50年前ってこと？」
「そうだ、あのころはベトナム戦争が終わったけど、反戦運動はけっこう尾を引いてた。ここ横須賀は毎年騒がしかったけど、今日はその点は静かじゃん」
　確かにドブイタからこの米軍基地まで、反戦デモみたいなものは無かった、「フレンドシップデー」の対応がしっかりしてるみたいだ。
　それにしてもすごい人並み、この分じゃ空母の甲板まで登り切るのに30分はかかりそうだ。
「グラーッ」空母へ登る階段が揺れる。そりゃそうだ、よく見るとこれ、階段じゃなくて長い鉄のハシゴじゃん。
「オット」オレはバランスを崩して前のお兄さんの腰に抱きついたみたいな格好になった。
　腰に硬いものがあった。それを掴んだから倒れずに済んだのだ。
「なんやコラッ」前のお兄さんが、関西弁で小さく叫んでオレを睨んだ。
「すいません、揺れたから……」と弁解するオレを、お兄さんは「許さヘン」みたいな怖い顔で、まだ何か言いたそうだ。
「シャーナイじゃん、スゲー揺れたんだから、そんなに怒るなよ『チ◯コ』を掴んだ訳じゃないし」とオレは無視した。
「何だあいつは？　何で関西弁のヤツが居るんだ、ここは横須賀じゃんか、薄汚い
緑のジャンパーなんか着こんで、と回りを見ると同じ風体の若者がパラパラと見える。……何かのグループ？　よく見るとみんなムスッとしてる、もっと楽しそうにできねえのかコイツらは？」と思った。

　なんとか甲板に登れた。「ウワッ、広い」、広いだけじゃない、翼をたたんだジェット機がたくさん並んでる。

「ウオッ、ファントムじゃんか」貴さんがつぶやいた。
『ファントム』って名は聞いた事がある。形も『これぞジェット戦闘機』みたいな
迫力がある。
　翼の下に尖ったミサイルみたいのがいっぱい付いてる、「貴さん、ミサイルっていつもあんな風に付けて置くもんなの？」
「あれはミサイルじゃねえよ、たぶん増槽だろ」
「『増槽』って何さ？」
「そう、言えば『予備燃料タンク』だな」
「あはっ、あれはミサイルじゃねえんだ」
「そうだ、空母内に行けばミサイルが見れるぞ」
　甲板上にも通路表示のラインとテープが続いている。それを辿って行けば、甲板の真ん中あたりで空母内に降りれそう、オレはワクワクしてきた。
　さんざん待たされたが、ついに空母の中へ入った。甲板から見ると地下1層と言うのかな。
「高い、広い」すごい空間、それが地下1層だ。
「いるいる」、ファントムがずらり、なんとここの機体にはミサイルが付いてる。
　直径が細くて小さい翼がついてる、どう見てもこれがミサイルだ。
　1層の中央付近に1機、見せるために置いてある。周囲に何カ所もハシゴがセットされていて装備や機内が見れる。見れるし触れる、オレはそれが希望なんだ。
さすがにコクピットには入れないが、ぎりぎり近くから見れる、外から見るだけで凄さが分かる。
「スゲエ、こんなに複雑で難しそうな場所って、世の中に無いよな……今から航空自衛隊に入ろうか」なんて気にもなる。
「おい、あれ、20mm機銃だぞ」と後から貴さんの声、指さす所に太いパイプの外周に穴が空いた銃口が見えた。
「20mmっていうと」、と指で20mmを作って見た。
「けっこう太い、こんな弾が連発で出るんだ」、そう考えると、とてつもない兵器だ、と実感が沸いてくる。
「ミサイルは『サイドワインダー』だな」と貴さんが叫ぶ。
「なに、それ爆弾の代わり？」とオレが聞くと、「ちがう、ちがう、それは空対空、敵の飛行機を打ち落とすための物、敵の排出熱をセンサーで感知して自動的に追っかけるやつ」と、貴さんの説明が入った。
「へぇ、この頃でも自動追跡なんてあったんだ、50年前だぜ……」と、オレは大感心。
　オレはハシゴを変えてファントムを舐めるように見尽くした。

「やばい、時間を使いすぎた、あと2時間しかのこってねえ」、まだ地下2層を見てない、急いで下り階段に向かった。
「おー、ここは兵器倉庫じゃんか」この層には飛ぶものは無いようだ、代わりに爆弾らしきものがあちこちに積んである。
　爆弾というとオレは広島の原爆のイメージしかもっていない、形はたしかに似てるが小型だ。
　ここには飛行機に搭載できる物が揃っている、爆弾は鉄のカゴに小分けされていて、床には縦横にレールが走ってる。
「なるほど、緊急時にはこのカゴ単位でレールを走って送るのか」そう理解したが
ちょっと疑問がある。
　レールを見ているオレに貴さんが言った。「このカゴ、全部スチームで動くんだ」
「スチーム？　蒸気のこと？」
「そう、このころの自動システムはたいがいスチーム駆動だったんだ」

「コンピュータ制御で、動力がスチームってこと？」
「ほぼそういうこと、だけどコンピュータは貧弱だった、あのころって言うと、そうだな、米軍であっても8ビットのマイコンぐらいだろう、だから一応自動では動くけど、もし、何かあったら、自動停止まではするけど、今みたいに画面操作で復帰は出来ない。復帰は手動だよな」
「ふうん、なるほど。だけど何で動力がスチームなんだろう、普通はモーターじゃないの？」
「勇気、『カタパルト』って知ってるよな、あの飛行機の発進に使う、蒸気がバシュと出るやつ」
「ああ、それならよく見るよね」
「あのころはまだ、モーターによる制御って完全じゃなかったのさ、力の必要な所はスチーム、強さの加減が必要な所は全部エア(空圧)だったのさ」
　オレはレールの脇にスチームらしいパイプが並んでいるのを確認した。
「この爆弾を積むカゴは、けっこう重そう、何トンも積むなら、スチーム駆動みたいだな」と納得。
　ちょっと歩き疲れた。貴じいさんからまだ聞きたいことが山積み、ちょっと離れた場所に、荷物があまり載っていない鉄カゴが見える。
「貴さん、あそこに行って、ちょっと話の続き……」と貴じいさんとレールの端の方へ移動した。そこはちょっと外れた何もないエリアなので、見学者がほとんどいない。そこにあった鉄カゴにはほとんど荷物が載っていない。少しの荷物をイス代わりに座って、さっき飲み残したコーラを取り出して、ちびちび飲みながら貴さんと話を始めた。
「さっきのね……ムッ、」話し始めて遠方がザワついているのに気づいた。
　地下2層への下り階段を、軍服を着た兵士がゾロゾロと降りてきている。
「勇気、なんかヤバイぞ、あれ、MPだぞ」と貴さんがちょっとクビをすくめて小さく言った。
「MPって？」
「ミリタリーポリスだよ、日本語だと『憲兵』だ」
　そう言われて見ると、何人かが銃を持っている。
「銃だよねアレ？」
「そうだ、銃だよ銃」
　オレたちは鉄のカゴの内側に隠り、カゴのすき間から目だけを出して観察を始めた。
　そのときだった、4〜5人の男がファントム機の回りに集まった。連中はシャツの中から何かを引き出してゴソゴソいじり始めた。
「よーし、それっ」誰かのかけ声で男達が持っていた白いビニールが膨らみ始めた。
「シュー」という音と共にそれらはどんどん大きくなる。一瞬で人の身長ほどに達した。それは大きなビニール風船だったんだ。
「なに？、『原子力空母、絶対反対　全共闘』って書いてある。あいつ、さっきムカついた関西弁のヤツじゃんか」オレは思い出した、一番近くにいるのは、あのときの、あいつだ。
「あいつ、左翼活動家だったんだ」と思わず叫ぶ。
「何だって、『全学連』みたいなやつか……」貴さんは理解したようだ。
　あちこちで怒号が飛び交い、乱闘が始まった。乱闘というより、MPが圧倒的に活動家を組み伏せているのがほとんどだ。しばらくするとMPの第2陣が降りてきた。関西弁の『あいつ』が風船を背負ってオレたちの方に逃げてきた、鉄のカゴにしがみついている。迷惑千万だ。
　しばらくするとMPの動作がちょっと違ってきた。なぜか日本人を取り押さえるのを止めた。上官らしき男が指令を出すと、MPが後に下がって二手に分かれた。
　前陣には第2陣と思える装備の違う連中が並んだ。なんと連中は銃をこちらに向けている。
「ウウッ」思わず声が出た。ここで銃を向けられることが何なのか、貴じいさんから聞いているからだ。

「ウウッ」オレは震えが来た。緊張でガチガチになっている。
「Ready！」上官が指令を出した。
　MPが銃を構えて前進してくる。「Go！」
　号令と共に「バシュッ」と緑色の液体が銃から吹き出した。
「何だコレ？」と思う間もなく液体は全身に掛かった。
「勇気、分かった、これ、マーカーだ」と貴さんが叫ぶ。
「何、それ？」
「簡単に言うと『敵味方識別色』だ、ここに居た者が逃げても見逃さないように印を付けられたんだ、この色、なかなか落ちねえぞ」
「そうか、ということはオレたちも不審者の印を付けられたってことかよ」
「そうだ、最高にヤバイ、あとで説明する」
「イテテ」オレと貴さんが同時にうめき声を出した。液が目に入ったんだ。
「アワワ」オレは焦って鉄のカゴを手探りした。箱状の部分があった。探っていると、丸い物が手に触れた。
「ガタッ」何かが動いた。
「シューッ」空気の音。
「ばかっ、おまえ何かのスイッチ入れただろ」と貴さんが叫んだ。
「グーッ」少し音を立てて鉄のカゴが動き出した。
「ヤバイッ」と貴さんが叫んだが、鉄のカゴは加速して行く。オレたちはしがみ付くだけだ。
「カシャッ」、「カシャッ」、「カシャッ」方向が三度変わった。
「ガシャッ」音が変わった。
「グーッ」、こんどは上に上がりだした。1層へ登るのだろうか。
「ガシャッ、バーン」大きな破裂音がして鉄のカゴは動かなくなった。
「シューッ」スチームの音だけが聞こえる。
「ウーッ」少し目の痛みが治まった。何が起きて、ここが何処なのか、分からない。
　目が見えるようになると周囲の状況が分かってきた。上も下も全部が鉄板だ、どうも鉄のカゴの自動移動ルートの中間点のように思える。
「貴さん、少し見える」と私は壁のすき間から地下2層の全体が見えることに気づいた。ちょうど2層の天井付近に位置する。
　2層の混乱は治まっていた。MPが多数散らばっていて、一般の日本人は、ほとんどが退出したようだ。
「貴さん、出ようよ、みんな出ちゃってる、オレたち取り残されちゃう」と言うと
貴さんがクビを横に振ってる。
「おまえ、現状が分かってねえ、まずこの状態からどうやって出るんだ、思うに、この鉄カゴ、自動で動くレールの途中で引っか掛かってるみたいだ、どこをどうすりゃ動くのか」と貴さん言われて考え込んだ。
　思い出せばここに来たのはオレが緑の液をくらって目が見えなくなり、何かのボタンを押してしまったのが原因だ。
「勇気、ここから逃げ出すのは可能と思う、鉄カゴのボタン、その操作方法が分かれば動かせるはず、押し方を間違えて、更におかしな所に行っちゃう可能性もある。だけどそれは何とかなる、問題はそこじゃねえ、問題はここが空母の中だってことだ、そしてもっと大きな問題はオレたちの立場だ」と貴さんは難しい顔になった。
「立場って言ってもオレ達何もしてないぜ、偶然が重なってこうなっただけじゃんか」
「その通りだ、問題は向こう側、要するに米軍から見てオレたちがどう見えるかだ」
「どう見えるって言うと？」
「いいか、こういう事に楽観は禁物だ、最悪を考えないと」

　最悪か……現状でも最悪なのに貴さん、さらに何かあるって言うのかよ。
「覚えてるか、この鉄カゴが間違って動き出した、その時爆発音がしただろ」
「覚えてる、結構大きな音だった」
「あれは風船が爆発した音だろ、風船を膨らませたのはガスライターのガスだったんだ。オレたちのカゴには関西弁左翼野郎が持ってた風船がたまたま1個くっついていた、カゴの移動中、それがどこかの角にこすれて爆発した。その音は意外に大きかった。ということは米軍が活動家の誰かが爆発物か、武器を持ってる可能性を疑っているかも知れないってことだ、状況は米軍本部に入ってるから、オレたちは今後、危険人物として扱われるわけだ」
「分かった、ここを出たらすぐに両手を挙げて『Give Up』をすればいいんだ」
「違う、そんなに米軍は甘くねえ、『Give　Up』の振りを信じて油断したら返り討ちに合う、ベトナムの戦場に行った連中は、そんな経験がある。やるかやられるかだ、何かあったら本当に撃つ。いまここは2025年じゃねえ、1975年の『空母ミッドウエイ』の中だぜ」
　そう言われてオレはガーンと来た。思い出した、あの関西弁左翼野郎の腰にあったのは、風船に使う小型のライターガスボンベだったのか、クソッ、どこまで絡んでくるのか。
「もう一回状況を整理してみる、オレ達が最悪、どう見られてるかって事。まず現場でこの緑の液を浴びたってこと、それはここで起きた騒動の場に居た証明だ。そしてここでは左翼活動があった。オレ達二人はその場を逃げ出し、その祭に何かを爆発させた。そのまま現場は収まったが、もし出て行った時、『隠れていた奴等が出てきた』ってことになる。時間も問題だ、現在この状況だ、すぐには出られない、向こうから見ると、出るまでの時間が長いほど、『すぐ出れば良いのに何か企んで潜んでいた』と見えるよな」
　そうか、単純にバンザイして出れば済む話じゃないんだ。どうすりゃいいんだ。貴さん、どう考えるの？
「さっき最悪って言っただろ、本当に最悪になった場合どうなるか、言っとく。
『殺されて消される』……いいか、オレ達がここに来たことは誰も知らない。記録もない。ということは、もし米軍がオレ達を始末しても、『だれも気がつかない』ってことだ」
「最悪の想像は分かったよ、もう、それは止めて、どうするかを考えようよ」
「そうだな、失敗のないように少し考えた方が良いな。まだ時間はある」
「オレ、思うんだけど、今のこの状況って、夢の中じゃなかったっけ、タイムスリップした時点から夢の中の現実を、さ迷よってるだけじゃないの？」
「そう、オレも同じ事を考えはじめた。あのお地蔵さんからずっと二人で夢をみてる。
　フッ、思い出したけど、勇気、おまえ『ラノベ』って読むか？」
「ライトノベルだろ、高校生のころに結構読んだ」
「あれって面白いか」
「面白いかって言われると何とも、だけど何冊も読んだから嫌いじゃない。普通の小説も読んだけど、なんて言うか面倒くさいんだよね、舞台設定とかが」
「逆だな、オレ達世代だとラノベなんて読めねえ、実は試しに何冊か読んだ。どれも『ふと気がつくとお城の中に居た』なんて始まり方じゃんか、なぜそこに居るのかは省略なんだな、舞台の背景描写なんかも省略、いきなり王女様が出てきて物語が始まる。そりゃあ、三島由紀夫の『潮騒』みたいに、海鳥が飛んでる、海岸の景色がどうとか、こうとか、物語の内容に関係ない背景描写に何ページも使うのはクドいと思う。だけどラノベで敵や主人公が何をするのも『魔法』で済ましちゃうのはどうかと思う、確かに何でも『魔法』で済めば書くのは簡単だ。究極の手抜きだけど、読むやつが居るんだから書くわけだ、究極のワンパターンをな、バカな世界だ」
「貴さんのご意見も、ごもっとも、それでふと思ったんだけど、今のオレ達、『夢の中の現実』にいる。これって『ラノベ』じゃないね、辻褄が合ってるから」
「そうだ、『現実感最高の夢小説』とでも言っとくか」
　じゃあ、夢を作ろうじゃんか、オレは前向きになってきた。同時に面白い事を思いついた

「貴さん、ラノベの話で思いついたんだけど、いい、こういう発想はどうだろう、
今が夢の中だとして、オレ達が寝て、夢を見たらそれは『夢の中の夢』ってことにならない？」
「『夢の中の夢』か、面白い、おまえ冴えてるな、さすがオレの孫だ」
　体の事を忘れてた。疲れてる。
「貴さん、ちょっと寝ようよ」
　同感だったようだ、オレたちは眠りについた。

　どのくら経ったろう、夢の中で目覚めた。オレはまた、お地蔵さんの前に横になっていた。貴じいさんも一緒だ。
　景色が違う、お地蔵さんは確かに目の前にある、だが遠くの方は霞んで見えない。
まるで近眼になったみたいだ。
　貴じいさんも目覚めた。目をこすっているから、同じ症状なんだろう。
「遠くが見えねえ」貴さんのお目覚め第一声だ。
「やっぱり」と感じた。
　と言うことは「遠くに行くな」って意味だと解釈した。この状態で遠くに行ったら迷って帰ってこれないもの。
　諦めてお地蔵さんを見ると景色が違う。中央の石碑は変わらないが、回りには棚があって、お供え物らしき置物がきちんと置いてある。
「何だこれ」カエルの置物みたいな物があった。しかし陶器じゃない、表面が生の
ヌメった感じがある。
「これ、生きてる」、よく見ると僅かに動いてる。呼吸しているようだ。
　その隣には羊羹 ( ヨウカン ) みたいな黄色い物がある。動くかどうか分からないがこれも生き物感がありありだ。
ムカデ、蜘蛛みたいなものもある。どうもこれらは古代生物みたいだ。形も不気味だから触る気にもならない。
　その棚はそんな物ばかりだ。気持ち悪いだけで、何かに役立つとしても使う気にはならない。
「勇気、こっちは生き物じゃないぞ、何だか分からねえが使えるかもしれんぞ」と、
貴さんが呼んだ。
　その棚には埴輪みたいな物、動物の模型みたいな物、道具らしき物が並んでいる。
「これ、何に使うんだろう？」不思議な形の小道具が沢山ある。
「おっ」一緒に道具を見ていた貴さんが声をあげた。
　貴さんが手に取ったのは比較的小型のトンカチみたいな物だった。トンカチの叩く部分の大きさが左右で違う。木製だから釘は打てないかもしれない、飾り物だろうか。
「勇気、『打ち出の小槌』って知ってるか？」と貴さんがそれを手に取り振ってみる。
「何ですかそれ」
「神話で出てくる魔法のトンカチさ、それに似てる」
「魔法のトンカチ？」
「そう、何かを願ってこれを振るとそれが出現するという神話さ」
「へえ、だとするとだれでも『小判』とか願って振るんでしょ」
「やってみようか、『一万円』」と貴さんがニヤケながら叫んで振った。
「……」何も出ない。
「ハハッ」と照れくさそうに貴さんが笑った。
「いや、トンカチだから、振るだけじゃなくて何かを打たないといけないのかも……」と言って、棚を「コンッ」と叩いた。……何も起こらない。
　いいかげん呆れた、オレは他の物を物色することにした。貴さんは飽きずに何度も棚を叩いている。その度に目がチカチカする。何で目に反応が来るんだろう。

「貴さん、次行こうよ」と声を掛けるが相変わらず棚を叩いている。
「貴さん、なぜかそれを叩くと目がチカチカするんだけど、止めてくれない」と苦情を言った。
「……」返事がない。
　オレは大きなハサミみたいな物を見ていた。「ハサミに見えるけど実際には切れないよな……」なんて思いながら。
「ウワッ」貴さんが大声で叫んだ。見ると「ちょっとこっちに来い」と手招きをしている。
「しょうがねえなぁ」と渋々行った。
「貴、驚くぞ、見てろ」そう言うと貴さんは腕時計を外して棚に置いた。
「見てろ」と叫んで貴さんが棚を「コンッ」と打った。
　目が「チカッ」として、秒針が動くのが見えた。
「何？……」
「もう一度見ろ」、「コンッ」
　今度は確かに見た、秒針が戻ったんだ。
「エーッ……」、言葉が出ない。
「貴さん、これ、時間が戻ったってこと？」
「そうだ……」
「このトンカチを打つと、一瞬だけど時間が戻るんだ」、「ウンウン」と貴さんが自分で納得している。
　分かった、あの目が「チカチカ」するのは時間が戻って場面が変わったってことだったのか……。
「叩き方によるけど1〜2秒戻る」
「ハハハ……」貴さんが笑い出した。満面の笑みだ。
「勇気、これ、すごい武器になるぞ」
「武器って？」
「考えて見ろ、例えばオレが勇気を殴ろうとして、構えて拳を振り出した瞬間、これをコンッ、と打つと1秒前に戻れる。そしたら、ちょっと姿勢を変えればそのパンチは空振りになるだろ、使うタイミングを覚えればプロボクサーと戦っても勝てる」
「そうか、それは相手が銃でも使える訳だ、狙った相手が瞬間移動したみたいになるのか……」
「その通りだ、だがそれだけじゃねえ、このトンカチの向きを逆にするとタイムスリップが逆になるんだ」
「進むってこと？」
「イエス」
　そこまで聞いてオレは疑問が沸いた
「ねえ、それなら、時間を止められないの？」
「それは出来ねえ、『時間って戻ることはあっても止められねえ』ってアインシュタインが言ってた」
「ハハハ、それはどうでもいい、とにかく、これさえあれば米軍と戦えるぞ、あと問題は、この夢が覚めたとき、トンカチも消えないことだけだ」
「貴さん、寝よう、でも寝れるかな……」オレは目をつぶった。無理にでも寝るんだと決めて。
「……」、「……」、「……」
「ムッ……」目が覚めた。なぜか艦内に「クイーンのボヘミアン」が流れている。
「寝れたんだ、オレ……」
　意識が戻ると慌てて手元を確認した。

「あるじゃん、トンカチくん……」スゲェ嬉しさだ、トンカチがあったぞ。オレは思わずそれに頬ずりをして拍手をした。
「ん……」
　その音を聞いて貴さんも目を覚ました。
「貴さん、これ、あるよ……ハハハハ」これ以上嬉しい事はあるまい。貴さんもそれを見てニッコリ。
　しばらくトンカチを眺めていたが、「あのタイムスリップ効果は本当にあるんだろうか？」心配になってきた。
「貴さん、夢の中の夢で見た『アレ』大丈夫かな？」
「ふふん、勇気、それが信じられないなら、この夢の中の現実もない事になる。大丈夫、絶対大丈夫」と貴さんは自信満々だ。
「試そうぜ」
　そう言うと貴さんは腕時計を床に置いた。
「いくぜ！」、「コンッ」床を叩いた。
「チカッ」、来た、あの感覚、間違いない、秒針も動いた。
「ほらっ、来たじゃねえか……」貴さんはオレを見て「どうだ」の表情だ。
「ラノベで書かれてる事なんか現実味がねえ、これこそ『夢の中の現実』なんだよ」
と、貴さんは胸を張る。
「よし、これで安心した。このトンカチ、……いやそれじゃ言い方が悪いな、もっと有難みのある呼び方にしねえと申し訳ねえ」と言って貴さんが、うやうやしくトンカチを拝むような仕草をした。
「ねえ、貴さん、いい呼び名が浮かんだぜ……『天狗』ってどう？」
「天狗？なんでそうなるの？」
「いい、このトンカチ、叩く物という意味ではそれで良いけど、本来のトンカチとは形が違う、これを横から見ると、オレは天狗のお面に見えるんだ」
　それを聞いて貴さんがトンカチを90°回して、少し遠ざけて見た。
「なるほど、確かに突き出た所を天狗の鼻と見ると、お面の横顔に見える。……いい発想だ」と、貴さんはうなずいた。
「マジでこれから命に関わる事が起きる。天からの贈り物とみて、これから『天狗』と呼ぼうぜ」
　意見が一致した。これからトンカチを『天狗』と呼ぶんだ。
「オッケー、気持ちが乗ってきた。『天狗』を使いこなそうぜ、まずタイムスリップの効果の確認だ、おそらく強く叩けば戻る時間が多くなる」
「貴さん、時間を進める実験もしなきゃ」
「分かってる、だけど時間を進めて何のメリットがある？　時間を戻せば前に言ったようにパンチを交わしたりできるけど、進めると……？」
「メリット大ありじゃん、例えばひと打ち1秒進むなら、「コンコンコン」で3秒後の世界になる。と、いうことはこの先どうなるか未来が分かる訳、ヤバかったら、戻して体勢を立て直せばいいんだ」
「なーるほど、確かに……」貴さんは納得。
　それから『天狗操作のシミュレーション』に入った。タイミングの取り方、その時どちらが『天狗』を持っているべきか、考えられる全ての動作を確認した。
「そうか……」ちょっと休憩していた貴さんがポツリと言った。
「何、なにか更に思いついた？」とオレが尋ねた。
「勇気、オレ達絶対勝てる……」と貴さんの目が笑ってる。

「例えばだ、オレが実弾をくらって、即死したとする。『天狗』を5回叩けば、オレは死んでない。だから二人同時に死ぬか『天狗』を失うかしなければ最後は絶対に勝つってことさ」
　それを聞いてオレは納得した。それで本当に完勝できるか、もう一度シミュレーションをしてみた。
「ん、」頭をフル回転させると大変な事に気づいた。貴さんに聞くのが怖い。
「貴さん、すごく大事な事。オレたち忘れてる……」
「何だって？　何だそれ、すごく大事な事？……」
「いい、貴さん、……『天狗』って何回使えるの？　無限ならいいけど……」
「ウッ」、それを聞いて貴さんも考え込んだ。だんだん厳しい顔になってきた。
「わからねえ、無限じゃねえことは確かだろう……」
「だよね、突然『時間切れ』になったら終わりってことか……」
　貴さんは『天狗』を手に持ったまま考え込んでいる。
「クソッ、それが分からないと作戦が立たねえ」、そう言いながら貴さんは、手に持った『天狗』を「クルッ、クルッ」と90°回転させて見つめた。
「ん……」ある角度で貴さんが回転を止めた。
「これ、もしかしたら……」、貴さんが急に笑顔になった。『天狗』を両手で持って、ちょっと体から離した。
　貴さんは、「なるほど」と一言いうと、『天狗』を「コンッ」、「コンッ」、「コンッ」と床で三度強く打った。
「貴さん、ヤバイよ、使える回数が減っちゃうよ」、オレは焦った。
　貴さんはオレの言葉を意に介せず、『天狗』をもう一度じっくり見直した。
「勇気、見ろ、『天狗』の鼻がズレてる……」
　オレは貴さんが指さす『天狗』の鼻を見た。
「分かった、そういうことか」
　『天狗』の鼻を下にして叩くと時間が戻る。1回叩く毎に鼻は短くなるんだ。その分『天狗』の後頭部にあたる部分が突き出してくる。つまり鼻の出た長さが使える分量と考えればいいんだ。鼻が平らになるまで叩いてしまうと時間を戻す機能は無くなる訳だ。逆に反対側（後頭部）に突き出た「時間を進める機能」は増加することになる。
「そういうこと」、貴さんがうなずいた。
　確かに時間は進めるか戻すかどちらかしかない、それはアインシュタインの言う通りだ。オレは妙に納得した。

　最も重要な『天狗』の使い方が分かった。それからは脱出法と、もし戦闘になった場合のシミュレーションだ、あらゆる場合を想定して打合せを行った。基本的に『天狗』を保持するのは貴さん、戦うのはオレだ。

「さて、実行に移そう、打合せの通り、まず、オレ達の存在を知らせることから始める、米兵は知らないはずだから、そこにある小さなすき間から何かを外に出して気づかせる。一番無難で安心なのは『白旗』だな、うまく気づいてくれればメッケものだ、誰かが居て『白旗』を出してる、『まだ残っていたのか……』で済む話だ」
「気づかなかったら？」
「自分たちで出て行くしかねえ、この鉄カゴを逆走させてな」
「操縦方法は？」
「そこの操縦装置のボタンを適当に押すしかねえだろう、運を天に任せるってことだ」
　まずは『白旗』の用意だ。しかしタオルもハンカチも持ってこなかった、布きれがない。

「貴さん、なんか布きれ、持ってない？　オレ、着ている物が全部黒か灰色なんだ」
「布きれ？　オレだって似たようなもんだ、チェックのシャツにランパンだぞ……」
「あっ……」、と貴さんが叫んで、押し黙った。
「なにか着てる？」
「着てるとは言わねえ、『付けてる』って言うんだ」と言って貴さんが腕を組んだ。
「『付けてる』なら外してよ」とオレが言うと、「仕方ねえ……」とランパンを脱ぎ始めた。
　どうも貴さんが勿体ぶると思っていたが、なんと『付けて』いたというのは『褌(ふんどし)』だったんだ。
「貴さん、ふんどしなら、形から言って『旗』の代わりにうってつけじゃん」とオレはフォローした。
「あっ、ダメかこりゃあ」と、貴さんが叫んだ。外したふんどしは浴びた緑の液が染みこんで白くなかった。
「でも黒よりはマシです」と言うのが精一杯、結局、緑のふんどしを壁のすき間から表に垂らす事になった。
「よし、外の状況は？」
「米兵が10人ほど、片付けをやってます」
「装備は？」
「2人がMPの軍服で、銃を持ってます」
「銃？　たぶん本物だ、緑の液を吹いた銃じゃねえな、まずいな……」
「しかたない、出せ」
　オレは壁のすき間から『緑のふんどし』を垂らした。なんて間抜けな展開だ。
　30分以上経った。何の動きも感じられない。
「貴さん、気づかないみたい、何か叩いて音をだすとか……」
「ダメだよ、さっきからBGミュージックの音が大きくなった。相当大きな音を出さないと気づかない」
「軍隊で、しかも空母の中でこんな曲を流して大丈夫なんですかねえ、米軍って？」
「それがアメリカってもんよ」
「はあ……」
　とにかく、だれも気づいてくれない。オレは痺れを切らした。
「貴さん、もう、行きましょう、それしかない」
「確かに、腹減ったし、もう、限界だな、やるしかない」
　鉄のカゴの端に小さな操作盤がある、ボタンが5個、赤、黄、緑、ピンク、白だ。
「勇気、おまえどれを押したか覚えているか？」
「全然……、緑の液を浴びて一瞬目が見えなくなって押してしまったんだから」
「そうか、とにかく、普通に考えると赤はストップ、黄は注意、緑がGO、だよな、
そうすると、戻るのはピンクか白ってことになるなあ」
「『同時押し』ってのもあり得る、ピンクを押しながら、緑でGOだけど、一気に行くんじゃなくて、押してる間だけ動く、とかね」
「うーん、考えてもしょうがねえ、ピンク、白を一回ずつ押してみよう。それで動かなかったら『同時押し』の可能性が高くなるな、どうだ……」
「同感……で、誰が押すの？」
「ようし、ジャンケンで勝った方」と貴さんが真剣な顔で言った。

　ここまで来て、しかも命が掛かってるのに、ジャンケンかよ、と思ったが、『だからジャンケン』とも言える。

「ジャンケン、ポン」貴さんがグー、オレがパーだった。
　一発で決まった。オレが押す。
「よし、押す前にもう一度現場を確認しようぜ」と貴さんが壁のすき間から地下2層の現状を確認した。
「確かにMPが2人、他は作業員っぽいな、オレ達が元居た場所、ちょうど清掃中だぜ、鉄カゴレールの末端だな。あいつら邪魔だけどしょうがない。よーし行こうぜ、オレが『天狗』さんに神頼みしたから大丈夫だ」と貴さんが片手を立てて『天狗』を拝む。
「神頼みかよ」と思いながらオレはボタンをもう一度見た。
「まず、ピンクを1回押すんだっけ」
　そう思いながら震える指がピンクボタンに触れた。
「勇気、突然ビュンッと動くかも知れないから、鉄カゴ、しっかり持ってろ」
「分かってるって」とオレは親指を立て[GOOD]サイン。
「えーい、行け！」と指に力を入れた。
「ビュワッ」一気に鉄カゴが動き出した。首が置いて行かれそうな凄い加速、想像していた3倍ぐらいのスピードで動く。
「ガッ」、「カッ」、「ガッ」来るときの逆コースを凄いスピードでトレースした。
　オレは曲がり角で吹っ飛ぶ寸前だった、貴さんも必死でしがみ付いている。
　スタート地点が迫る、清掃していた米兵二人が気づいてこちらを凝視して固まっている。
「ドンッ」停止位置。遠慮無い停止だった。ほぼ衝突に近い。
「アッ」悲鳴に近い声を出して、オレと貴さんは鉄カゴから放り出された。必死でしがみ付いていたため、手が離れた時、反作用で空中で綺麗にクルリと一回転。
「ドカッ」、「ヅカッ」オレと貴さんは膝から米兵の上に落ちた。見事過ぎる膝蹴りがヒットしたような絵になってしまった。
「アウッ」、「オウッ」二人の米兵は呻いただけで、完全に失神した。
　逆にオレ達は米兵をクッションに、ダメージなく、スッキリと正立してしまった。それがまずかった。もう完全にオレ達は『突然出現した悪役』になった。
「What？」、「Why？」その状況を遠くで見ていたMP達は、あっけにとられてすぐには行動が起こせない。
「貴さん、何か振らないと、何か.....」とオレは叫んだが、貴さんは首を横に振った。
「ダメ、最悪だ、いまさら降伏のサインなんか遅い、連中、銃の用意に入ったぞ」
　見るとMP達が銃を持ち直して、何かしている。
「安全装置を外してるんだ、次、オレ達の足を狙って撃ってくるぞ」と貴さんが叫んだ。
　打合せで想定の最悪パターンに陥った。もう、戦闘モードしかない。一発で死ぬことはないだろうが、足を撃たれたらヤバイ、オレは米兵に向かってダッシュした。
一人目のMPが銃をオレに向け、構え始めた。
「チカッ」想定の通り、2秒戻った。オレはジャンプして、チョーパン(頭突き)をお見舞いした。
「ガツッ」痛そうな音で命中、MPは吹っ飛んだ。
　間髪を入れずに、MPの銃を拾い上げる。オレが銃を取った瞬間、「チカッ」タイムスリップが起きた。
　二人目のMPが銃をオレに向ける直前だった。

「パンッ」オレは自分の銃床で、ヤツの銃を払い落とした。何が起きているか分からないMPは呆然としている。そりゃそうだ、突然オレが現れ、自分の銃は弾き飛ばされているんだもの。
「ごめん！」そう心で叫んで、オレは銃床でヤツの側頭部を打った。
「バンッ」、また決まった。一瞬でMP二人を倒した。
「貴さん、タイミング、バッチシ」オレはまた、親指を立て[GOOD]サイン。
　他の米兵は、目の前で起きていることが信じられないのだろう、皆、呆然としている。もう、今逃げるしかない。貴さんと目で合図、全力で走って地下1層へ向かう。
　幸い登りの階段はだれも居なかった。
「ハアハア」、貴じいさんが限界っぽい。
「大丈夫？」とオレが声をかけると、「須賀っ子だぜオレは」と強がる。
　空母甲板まで出ると、あとは全部下りだ、米兵もまばら。
「もう一息」と声を合わせ、ベースの出口に向かった。
　出口まで50m、もう足が死んだ、ヨタヨタになってる貴さんを引っ張るのも限界だ。
「ウーッ」「ウーッ」けたたましいサイレンが鳴りだした。
「ヤバイ、警報がでたぞ」、と貴さんが「こうこれまで」みたいな顔になった。
「クソッ、何かないか……」と辺りを見回すと、「ブワンッ」ジープが間近に止まった。すぐ男が降りてきて、急いで建物に向かった。
「ラッキー、トイレ行きだ」オレは直感でそう思った。
「キー付きで……」そう願った。正に「神頼み」
　乗り込むと[GOOD]、当たりだった。
　倒れそうな貴さんをやっと車に引きずり込む、エンジン始動。
あとは入り口の木の柵を車で弾き飛ばせば基地から出られる。日本に戻れるんだ。
　最後に貴さんの状態を確認、デレッと寝ているが、オッケーだ。
「ウーッ」別のサイレンが聞こえた。後を見ると遠くに赤灯を点けたMP車両が見えた。
「あばよ」と叫んでアクセルを踏んだ。車が「ドン」と急に動き出した。
「天狗」、「天狗」と貴さんが叫びだした。あわててブレーキ。
「天狗を落とした」と貴さんが焦ってる。
　後を振り返ると、確かに『天狗』は地面に落ちている。しかし天狗の鼻は折れ、そばに転がっていた。
　もう、取りに行けない。オレは無言で車を再加速した。
「バンッ」入り口の柵を突破、ついに日本に戻れた。国道16号を「お地蔵さん方面」に向かって全力疾走だ。
「お地蔵さん」は基地からそう遠くではない。200mほど走って、ドブイタ通りの
入り口に達した。貴さんもすこし元気をとりもどしたようだ。
　ジープを国道に乗り捨て、お地蔵さんへ向かう。
「もう日本だから捕まる心配はない、ゆっくり行こうぜ」と貴さんが歩き出して、ドブイタの角でピタリと止まった。じっと目の前の店を見ている。
　しばらくして貴さんが店に入った。オレも後を追う。
　店には若い女性がいた。
「あのう、あなた、……あなた『平野さん』じゃないですか？」
　貴さんが口ごもりながら尋ねた。
「はい、そうですけど……、何か……」
「ウワッ」貴さんがいきなり泣き出した。女性が戸惑っている。
　オレは何が起きているか分かった。貴さんは1974年の女性に出会ったんだ。

　暫くして貴さんが泣き止んだ。「お地蔵さんに行こう」と言う。
「あの、何かお困りですか？」と女性が声をかける。
「いや、何でも無いんです……」と貴さんは何度もお辞儀をしてそこを離れた。
「ウウッ……」貴さんは歩きながら泣いた。
　突然、「今何年だ？」と聞いてきた。「1975年じゃなかったっけ？」とオレは答えた。
「そうだ1975年のはずだ、しかし『平野さんは1974年に急性白血病で亡くなったはずだ……』と貴さんが首をかしげる。
「分かった、『天狗』だ、天狗が壊れてタイムスリップが変わったんだ」
　なるほど、そうかもしれない、しかしここは夢の中の現実、早く現代に戻らないと。オレは貴さんを引っ張ってお地蔵さんへ向かった。
　お地蔵さんに着いた。
「どうすれば戻れるんだ……」オレは必死で思い出した。
「二回目の地震の時、どうしたか、確か石碑のてっぺんを押さえて、裏の文字を読もうとしたんだ。それを貴さんが止めようとしてオレのベルトを引っ張った」
「そうだ、そうだった」と貴さんも同意。
　どうなるか、やるしかない。
　記憶の通り、オレは石碑の裏に手を差し込んだ。
「ピカッ」何かを感じて、オレは気を失った。
「……」「……」
「ん……」目が覚めた。貴さんも隣で寝ている。
　寝ている貴さんは『天狗の鼻』を握りしめていた。